



### 目 次

埋蔵文化財資料館と図書館との連携について・1	展示 - 地域公開への試み - . . . . . 8
海外研修報告 . . . . . 4	トピックス . . . . . 10
国内研修報告 . . . . . 6	本学関係教員著作物寄贈図書 . . . . . 12

## 埋蔵文化財資料館と図書館との連携について

山口大学埋蔵文化財資料館館長（教育学部教授）系長 雅弘

### 1. 埋蔵文化財資料館の役割

山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という）は、文化財保護法に基づき、山口大学（以下「本学」という）に所在する埋蔵文化財の発掘調査及び研究を行い、並びに出土品を収蔵し、公開することを目的として設置され、山口大学図書館（以下「図書館」という）及び山口大学メディア基盤センター（以下「センター」という）とともに山口大学大学情報機構（以下「機構」という）を構成しています。本学のキャンパス（常盤キャンパスの一部を除く）は埋蔵文化財を包蔵する土地として周知されているため、土木工事その他の目的で土地の発掘を行おうとするときは、所管する教育委員会への発掘の届出及び同教育委員会の指示があるときは発掘調査の実施が不可欠となっています。毎年数回この発掘調査が



「吉田遺跡発掘調査速報展 2006」

あり、中には調査が長期に及ぶものもあることから、資料館は発掘調査ばかりしている組織と見られがちですが、出土資

料を整理し、その公開展示を行うことも資料館の重要な任務です。現在も平成19年3月2日までの予定で、第22回企画展として、「吉田遺跡発掘調査速報展2006」が開催されています。

## 2. 山口大学所蔵学術資産継承事業プロジェクト

本年度、本学が所蔵する学術資産を将来の学生、研究者等に遺漏なく受け渡し、継承していくため、機構に山口大学所蔵学術資産継承事業プロジェクト活動委員会が置かれ、各部局が所蔵する継承すべき学術資産（以下「継承資産」という）の網羅的な調査が行われました。この調査では、継承資産を、本学が所蔵する有形文化財・民俗文化財・記念物・埋蔵文化財その他の歴史上、芸術上又は学術上価値の高い有体物であって、将来にわたり組織的に管理し、継承すべきものとしています。例えば、次の各号に掲げるものが、継承資産に該当します。

- (1)古文書、稀覯本、土器その他の貴重な資料類又は書籍類
- (2)絵画、彫刻、工芸品その他の貴重な芸術作品類
- (3)主要な産業の商品、重要な貿易商品その他の貴重な商品資料類
- (4)岩石、鉱物その他の貴重な標本類
- (5)実験装置、農機具その他の全国的に見て現存するものが少ない貴重な装置類又は機具類

この調査によって、資料館の所蔵する出土資料、図書館の所蔵する各種コレクション等を含む、多くの継承資産が分類整理され、その結果が本学の学術資産リストとしてまとめられました。今後は、この学術資産リストを基に、現物資料自体の継承方法を検討し、将来にわたり組



「吉田遺跡発掘調査速報展2006」の展示



埋蔵文化財資料館

織的に管理していくとともに、継承資産の媒体変換（デジタル化）、未整理コレクションの目録作成、媒体変換された継承資産（以下「電子継承資産」という）のデータベース化等を計画的に行っていく必要があります。

## 3. 山口デジタルミュージアムの構築に向けて - 資料館と図書館との連携 -

電子継承資産のデータベース化は、山口デジタルミュージアムの構築に向けた第一歩に過ぎません。ここでは、「山口デジタルミュージアム」とは、学術情報及び電子継承資産の収集、整理及び保管をする仕組みであって、ネットワークを通じてそれらを世界に向けて発信し、又は必要とする人の用に供するものとしておきます。現在図書館が構築を行っている

学術機関リポジトリ YUNOCA は、本学の教員による学術研究の成果を世界に向けて発信する仕組みであり、山口デジタルミュージアム機能の一部を果たしています。電子継承資産をデータベース化し、YUNOCA をその検索・公開エンジンとして機能させるように拡張することができれば、山口デジタルミュージアムの構築により一歩近づくことになります。

山口デジタルミュージアムの構築には、IT に関するセンターの支援も必要ですが、それと同等又はそれ以上に重要なのは、資料館と図書館との連携です。資料館には学芸員、図書館には司書の資格をもつ人たちがおり、彼らは、専門知識をもって収集した資料の整理、保管及び提供等の業務を行っています。山口デジタルミュージアムを利用者の視点に立って構築するには、資料館と図書館との連携の下に、彼らの知識、能力及び経験を最大限活用することが求められます。



学術機関リポジトリ「YUNOCA」

<http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/yunoca/>

#### 4. Brand YU の実現に向けて

国の IT 戦略本部は、平成 18 年 1 月 19 日付で、IT 新改革戦略を策定しました。この中で、2010 年度には IT による

改革を完成するという目標を立て、今後重点的に取り組む IT 政策の一つは、世界への発信であるとしています。そして、国際競争社会における日本のプレゼンスを向上させる具体的な方策の一つとして、「我が国の誇る国宝、重要文化財をはじめとする文化遺産のデジタル化や、世界市場を意識した魅力的なコンテンツの創造を戦略的に推進し、インターネット等を通じ、日本の魅力を世界に発信する」ことを掲げています。

本学において、上記の国の方策に対応するのが、山口デジタルミュージアムの構築です。国内外における本学のプレゼンスを向上させ、本学のブランド力を高めるには、山口デジタルミュージアムの構築が喫緊の課題といえます。山口デジタルミュージアムを構築し、Brand YU (Yamaguchi University) を実現するには、機構のみならず本学のすべての教職員が連携協力し (All YU)、直面する諸課題の解決に取り組む必要があります。また、その際、学生をはじめとする教職員以外のステークホルダーの皆様にも、その支援を仰ぐ必要があると思っています。

(いとなが まさひろ)





## 海外研修報告

# 米国大学図書館を訪問して

平成 18 年 11 月 13 日～17 日、大学図書館員と大学生協職員との共同研修プログラムで、米国西海岸を訪れ、カリフォルニア大学バークレー校（以下 UCB）図書館、スタンフォード大学図書館、大学生協の洋書流通拠点である COP 社を訪問する機会を得ました。研修の中で特に印象に残った事項について、簡単にではありますが報告させていただきます。

UCB 図書館では Doe Library、Moffitt Library、Bancroft Library の 3 つのメイン図書館を訪問しました。館内では日本の大学図書館に比べ学生スタッフの姿が多いのが目にとまりました。専門知識が必要なレファレンス、選書、目録などは図書館員が行い、貸出・配架などは学生スタッフに任せるといった分業制が成り立っているようです。米国では図書館員の専門性が高く、Librarian と呼ばれる図書館員は専門分野及び図書館学の修士号を持っており、専門分野のレファレンスに回答する他、学部の教員と協力して学生へのリテラシー資料を作成したりしています。同図書館では利用者ガイダンスを特に重視されているとのことで、日程表などの案内資料を図書館内だけでなく、学部や学生寮にまで送っているそうです。



カリフォルニア大学バークレー校 Doe Library

スタンフォード大学は北米屈指の名門私立大学で、卒業生には Yahoo! や Google の創始者などがいます。図書館は学部毎に 20 の図書館があり、今回はメインの Green Library を訪問しました。図書館員の方々とミーティングでは主に選書とリポジトリについて伺いました。選書については、選書担当の図書館員の方々が学内の図書の需要を把握するために様々な努力をされているというお話が印象に残りました。例えば教員の Web サイトを調べたり、学内セミナーが開催されていれば、その担当者に名刺を渡して必要図書を連絡してもらうように伝えたりしているそうです。

同大学では、昨年、リポジトリの有益性、将来性を審議するための理事会が立ち上がりました。米国では大学毎のリポジトリの他に複数大学で共同して構築しているリポジトリ（例えば分野毎に担当校を決めて収集・公開するなど）があり、今後はそういった共同管理についても課題になってくるだろうとのことでした。

今回の研修では UCB とスタンフォード大学という米国でも高水準の大学図書館を訪問することができました。いずれも何か特別なことをしているわけではなく、利用者からのレファレンスに回答できるだけの専門知識をもった図書館員が揃っていたり、ガイダンスに力を入れたり、図書館としての基本的なことを丁寧にやっているということが、サービスの向上につながっているとの印象を受けました。山口大学図書館は予算・人数の面ではこれらの大学にはるかに及びませんが、限られた予算・人数の中でも米国の大学図書館に見られるような大学・教員・学生のニーズに応えられる、少なくとも図書館員がそれらのニーズに応えようとする意志を持っているような図書館であるべきだと感じました。（工学情報係 木越みち）

## SD 研修に参加して ～ ドイツ エアランゲン・ニュルンベルク訪問～

平成 18 年 10 月 23 日～10 月 30 日の 8 日間、本学のスタッフディベロップメントの一環として、ドイツへ研修に行きました。バイエルン州の、本学協定校であるエアランゲン・ニュルンベルク大学を訪問し、大学の中央図書館を始め、研究室の図書室や、ニュルンベルク、エアランゲンの市立図書館、バンベルグにあるバイエルン州立図書館（計 9 ヶ所）を見学し、それぞれの司書の方々にインタビューを行いました。

ドイツの図書館は、とても歴史を重んじており、英米ほど革新的なサービスは行われていませんでしたが、今まで、英米のような先進的な取り組みや、新しいサービスを行う図書館が良い図書館であると思いついていた部分があったので、ドイツの歴史や伝統を重要視する姿勢は、とても新鮮に感じられました。資料の選定に時間をかけ、古い資料を大事に保存し、専門性と誇りを持って仕事をしている姿は、まさに「図書館員」でした。日本では資格取得制度の違いもあり、各学術分野に専門的知識を持っている司書を配置するというような体制をそのまま取り入れるのは難しいと思います。しかし、質の高い図書館を作るには、職員自らが自己研鑽を行い、利用者ニーズを捉えたサービス



バンベルグの街並み



エアランゲン・ニュルンベルク大学経済学図書館



カタログガールの部屋

展開の必要性を感じました。そのためには、新しいサービスを導入することも大切ですが、配架の整理や、カウンターでの対応など、基本的なサービスを再度見直さなければならないと思いました。

また、現在、バイエルン州の大学は過渡期にあります。というのも、今までは授業料制度がなく無料で授業を受けられていたのが、日本に比べると少額ではありますが、授業料制度が開始されるためです。有料になることに伴い、エアランゲン・ニュルンベルク大学も、学生サービスの向上を全学的に検討しているという話を聞きました。今後、どのようにサービスを展開していくのが注目したいと思います。（情報サービス係 笹本祥子）

## 国内研修報告

### ●学術ソリューションセミナーおよび

#### ライブラリ・コネクト・セミナー2006

平成 18 年 7 月 3 日(月) 大阪において開催されたサンメディア主催の学術ソリューションセミナーおよび、翌日 7 月 4 日(火)に同じく大阪で開催されたエルゼビア・ジャパン主催のライブラリ・コネクト・セミナー2006 に出席しました。前者では各出版社の取り扱う電子商品の紹介があり、後者では国内外の大学の事例など 7 つの講演が行われました。2 つのセミナーから共通して感じられたことは、ただ紙媒体を電子化するだけの時代は終焉にさしかかり、電子リソースを統合的に利用し、必要な情報をより素早く、より正確に発見することへポイントがシフトしてきているということです。電子化時代においては、Web 上で情報を入手しやすい環境を整えることが図書館のサービスとして重要になるということを実感する一方で、Web ではできない図書館ならではのサービスの在り方についても考えさせられた 2 日間でした。(情報サービス係 野間恵梨子)

### ●平成 18 年度

#### 第一回中国・四国地区コンソーシアム懇談会

平成 18 年 8 月 10 日(木) 広島大学にて中国・四国地区コンソーシアム懇談会(平成 18 年度電子ジャーナル地区説明会)が開催されました。

皆さんは次にあげる用語・事柄をいくつ知っていますか? 「Ej92」「他大学の契約状況確認」「CAP」「DDP」「Big Deal」「Embargo」「Springer & OUP2006 提案」「NII-REO」「ILL/学外者の利用」「不正ダウンロード」。これらを再認識し、契約事務を行わなければなりません。

コンソーシアム提案は、最低保障ラインであり、コンソーシアム契約チェックポイントにより、出版社提案について要注意事項をチェックし、各大学の事情に合わせて個別交渉を行います。交渉は

論ではなく、双方の利益互惠を目指した調整作業であることを忘れてはなりません。

また、学術情報の安定的な確保のため、EJ 中心の契約に切り替え、経費を共通経費化し、冊子は研究者の判断とする解決策が提言された。

(情報管理係 田中俊二)

### ●平成 18 年度学術ポータル担当者研修

平成 18 年 8 月 30 日から 9 月 1 日までの 3 日間、名古屋大学附属図書館と国立情報学研究所の共同主催による平成 18 年度学術ポータル担当者研修が、名古屋大学附属図書館で開催されました。研修のテーマは「機関リポジトリの構築」で、主に学内での広報について、実践方式での研修が行われました。

1 日目・2 日目は、参加した 15 機関からの機関リポジトリの現状報告、機関リポジトリを構築している広島大学、名古屋大学からの事例報告が行われました。これら他機関の状況を知ること、本学の状況と比較することができ、これから構築作業を進めていくために何が必要かを考えることができました。

また、最終日には、機関毎に分かれて、本番さながらのプレゼン実習が行われました。実際に、発表スライドや資料を使い、規定時間内で行わなければならないことも大変でしたが、受講者に扮した講師の方々からの質問に対して答えるのが難解であり、また大変参考になりました。

この研修に参加したことで、今後の広報活動に対する方向性が見えた気がしました。

(利用者サービス係 守永盛志)

### ●学術情報セミナー

「Web 時代の学術情報利用環境を考える」

平成 18 年 10 月 6 日(金)九州大学において行われた学術情報セミナーに参加しました。



学術情報の利用環境が Web へと大きく変わっていく中、講演では、アメリカの図書館の最新動向をはじめ、早稲田大学における Web2.0 を目指した学術情報利用環境の構築方針、九州大学におけるリンクリゾルバ導入についての事例報告など、利用者環境向上のための取り組みが紹介されました。また、エルゼビア・ジャパンによる学術コンテンツ提供者の立場からの取り組みについても説明がありました。

従来の図書館サービスとともに、今後は、Web 環境を含めた環境の重要性を意識し、利用者がスムーズに利用できる環境の構築に努めたいと思います。(情報支援係 深川昌彦)

#### ●第 47 回中国四国地区大学図書館研究集会

平成 18 年 10 月 19 日から 20 日の 2 日間、松江市で行われた「第 47 回中国四国地区大学図書館研究集会」に参加しました。

「学術コミュニケーションの変容と大学図書館のマネジメント - 新たな展開に向けて -」をメインテーマに、1 日目はまず次世代の学術情報基盤の整備等の取り組みについて NII から報告があり、続いて情報リテラシー、機関リポジトリ、大学図書館の地域貢献等のテーマで各大学から事例報告が行われました。

2 日目は 2 班に分かれて分科会があり、私が参加した第 1 分科会では、機関リポジトリ、学術情報の収集、整理、提供等のテーマで各大学より現況報告、次いで意見交換が行われました。

情報ツールの紙媒体から電子化への移行、高度化の流れの中で、分からないことも多く、今後の勉強の必要性を感じた 2 日間でした。

(情報管理係 蔵野祐二)

#### ●共同ワークショップ 2006

「日本の機関リポジトリの今」

千葉大学にて、平成 18 年 11 月 16 日から 2 日間にかけて、共同ワークショップ 2006「日本の機関リポジトリの今」が開催されました。

図書館員、学会関係者など延べ 220 名以上の参加者があり、機関リポジトリに対する活発な討議

が行われました。

大会は 1 日ごとにテーマが分かれ、第 1 日目は「著作権とオープンアクセス」、第 2 日目は「C S I 事業の意義とケーススタディ」をテーマとし、それぞれのテーマに深く関わる講師陣からの発表・報告がされました。

また、パネルディスカッションも 2 回行われ、パネリストたちのそれぞれの立場による意見には会場の参加者も興味を示し、活発な質疑応答がされました。

最終日には、各機関が作成した広報資料やグッズのコンペも行われ、最後まで盛況のまま終わった大会でした。(利用者サービス係 守永盛志)

#### ●NII シンポジウム

「デジタル巨人の肩の上に立つ」機関リポジトリ、e-サイエンス、および学術コミュニケーションの将来に関する国際シンポジウム

平成 18 年 12 月 18 日から 19 日の 2 日間、国立情報学研究所 (NII) 主催のシンポジウムに参加しました。

初日は、ダニエル・グリーンステーン氏による基調講演および、セッション 1「機関リポジトリ：進化する研究インフラ」マックス・ブランク電子図書館ディレクターのローラン・マリー氏と、NII 所長の坂内正夫氏の講演、講演後の質疑応答では、予定時間を超え、研究インフラ整備への関心の高さが伺えました。翌日、セッション 2「学術出版：評価、アクセス、発信」、引き続いてセッション 3「高等教育のためのデジタル資源の課題」でも、講師それぞれの立場で目指すものを聞くことができ、各国・組織それぞれの事情があっても、「新しい価値をもたらすための基盤整備」に向け、試行錯誤しながらも相当の覚悟をもってチャレンジを続けていることを痛感しました。

山口大学も、次世代の学術情報基盤の構築に向けて歩み始めています。国内外の動向に注目しながら、しっかりと構築していこうと思います。

(情報支援係 深川昌彦)

## 展示 - 地域公開への試み -

総合図書館では、年に1~2回テーマを替えながら常設展示を行っている。今年度は昨年度から引き続いて6月末まで「山口市街の探訪展」を、7月1日(土)からは長州ファイブの一人をとりあげた「山尾庸三展」を開催中である。

「山口市街の探訪展」は、平成17年に山口大学経済学部が明治38年の山口高等商業学校開校から数えて創立百周年を迎えたことを期に企画されたものである。当時の卒業アルバムの中、山口市街の写真と現在とを対比させれば、歴史的にも大変興味深いものになるのではと校舎や学生生活以外にも数多く残る市街の写真を調べ、現在でも場所が特定できるものについては、ほぼ同じアングルで撮影し、当時の写真と並べて展示した。7月1日(土)の七夕祭では学外利用者にも見ていただくために会場を一般閲覧室に移し、一日だけの特別展を催した。特別展は学内のみならず、マスコミ関係者にも広報した結果、数社の新聞で紹介された。

山口県立山口図書館においては9月30日(土)、毎年恒例の図書館振興県民のつどいに「山口市街の探訪展」で参加し、また7月31日に調印された山口県立山口図書館・山口県立大学附属図書館・山口大学図書館三館の相互協力協定の記念として、10月3日(火)~15日(日)まで「山口市街の探訪」のパネル展を行った。近郊の利用者には大変興味深かったようで、「昔と今の違いがとても面白かった」、「記録を残すことは大切だ」、「写真には強いインパクトがある」などの感想が寄せられた。普段、一般市民の生の声を聞く機会多くはないため、好評を得たことは今後の活動への大きな励みとなった。

また昨年は、幕末に英国に密航した県内出身の5人の若者「長州ファイブ」が映画化され、



「山口市街の探訪」パネル展(山口県立山口図書館)いたるところで、「長州ファイブ」が話題にのぼった。西洋技術や知識を学び、帰国後近代日本の礎を築いた5人とは、後に明治新政府で内閣制度発足時、初代内閣総理大臣となった伊藤博文、初代外務大臣井上馨、鉄道建設に生涯を捧げた井上勝、造幣局長として日本人の手で初めて貨幣を造った遠藤謹助、工部学校(現東京大学工学部)設置や聾啞教育に尽力した山尾庸三のことである。

ロケが行われた萩市では、萩博物館で7月1日(土)~9月3日(日)まで「長州ファイブ展」が、須佐図書館では7月1日(土)~7月23日(日)まで「長州五傑のたどった道」と題した資料展が行われた。須佐図書館からは展示会開催にあたり、当館作成資料の借用依頼があった。ほぼ同時期、萩市からも資料閲覧と借用の申し出があったため、パネル資料と電子データを両方に届けた。普段から絵や写真を豊富に盛り込んで、見て楽しく分かりやすいものを作るよう心がけているが、気に入っていただけようだ。須佐図書館からは、開催中の様子などを撮影した写真が送られてきて、当館との展示の違いや雰囲気を楽しむことができた。萩市は、今年度「長州ファイブ」にちなみ、「長州ファイブ



ブジュニア」と称して、市内の中学生5人を夏休みに英国に派遣している。

現在当館で開催中の「山尾庸三展」では時期折々に内容を更新しているが、同様に「長州ファイブ展」を開催していた山口県立山口図書館が9月30日(土)で展示終了した直後の1ヶ月間は、多くの関連資料を借りて利用者に紹介できた。中でも映画のシナリオは珍しさも手伝い好評で、昨年10月下旬に先行上映された映画をさらに楽しむことができた。12月2日(土)の大学祭「姫山祭」では、「オープンライブラリー2006」として、この「長州ファイブ」を展示テーマに取り上げた。数年前にも同じ企画展を行ったのだが、今回、話題性のあるこの時期に再度資料の見直しを含め、アーカイブとして残せるものにしたと考えたからである。また埋蔵文化財資料館からは「長州ファイブ」が活躍した幕末に構内で発掘された遺物が出品された。当日は館内にメディア基盤センターのインターネットラジオのブースが設けられ、職員も参加して、展示にまつわることが生中継された。

今年度初の試みであった大学主催の「シニアサマーカレッジ」が、8月28(月)~9月10日(日)に実施され、初日のオリエンテーションに図書館の利用方法が組み込まれ、館内案内の際に展示コーナーも紹介した。授業に「長州ファイブ」が組み込まれていること、映画化されたことなど関心度が高いことによるものである。また、12月8日(火)には中国から西華大学訪問団を迎え、同様に展示を紹介した。言語が異なるにもかかわらず、みなさん非常に熱心にご覧になり、さかんに写真を撮っていた。特に、「オープンライブラリー2006」用に作成した等身大の長州ファイブの集合写真の前では、交替で記念写真を撮るなど、こちらが驚かされるほどだった。

現在、パンフレットも山尾庸三に加え、長州ファイブの改訂版を用意しているので、興味のある方は是非手にとってご覧いただきたい。

自分の住んでいる町の歴史を知る、地域を知



「長州五傑のたどった道」(萩市立須佐図書館)



サマーカレッジ受講生のオリエンテーション



西華大学図書館長と大場部長

ることが地域連携へと結びついていくものなら、展示もひとつのアーカイブとして、学内に留まらず、広く地域の人々にも活用していただけるものにしていきたいと思う。(情報サービス係)

## トピックス

### ●第 77 回 NPO 法人日本医学図書館協会総会

平成 18 年 5 月 25 日(木)・26 日(金)の両日、名古屋市の「ウィルあいち」に於いて国公私立等 110 機関から 195 名が参加し「第 77 回 NPO 法人日本医学図書館協会総会」が開催されました。

初日は、「ライフサイエンス情報の新しい流れ」というテーマのもと、「NPO 法人としての日本医学図書館協会の今後に期待する」と題して基調講演があり、続いてパネルディスカッション「JMLA の新しい展開」が行われました。これらの中で、学術雑誌をめぐる諸問題として、重複雑誌交換、分担購入、電子ジャーナル・コンソーシアムの 3 点については、各々の図書館に共通する課題であり、活発な議論が展開されました。

2 日目は、平成 18 年度の事業計画案や予算案が審議され、事業計画については、認定資格制度、国立ライフサイエンス情報センターの設置などの説明がありましたが、厳しい財政状況を考慮すると、個々の案件について更に検討し、採算のとれない事業については規模を縮小するなど、見直しを図るべきとの発言が出ました。

総会分科会では、「医学情報の一般への提供 - 国立ライフサイエンス情報センター構想を視野に入れて - 」というテーマでグループ討議を行いました。病院図書室など直接患者さん向けのサービスを行っている図書館の現状や課題を聞くことができ、参考になりました。

同じ医学系の図書館とはいえ、様々な組織の立場の異なる人との意見交換を通して、全国レベルのネットワークが構築でき、有意義な総会でありました。

### ●教育学部附属養護学校実習生受入

山口大学総合図書館では平成 17 年度より同大学教育学部附属養護学校生の現場実習に協力し、高等部生徒の受入を実施いたしました。

本年度は 6 月 21 日から 27 日と 11 月 27 日から 12 月 6 日まで 2 回受け入れました。今回の業務は、ID ラベル貼付、研究室からの資料返却処理、配架作業を行っていただきました。

生徒が職場の体験を通じて、社会自立に向けた体験の幅を広げると共に、就労に向けたマナー等を身に付ける機会を提供し、自己の能力や適正・関心等に応じて適切な進路選択が出来るよう支援出来る一翼を担うことができるならば、との館員の思いでありました。

実習生も「是非図書館で働きたい」と感想を話してくれました。

養護学校の先生方の熱い思いが、生徒の後押しをし、ノーマライゼーションの基本理念に基づき福祉の向上が図れるならば、今後へつなげる橋が架かるのではと考えております。

### ●平成 18 年度目録システム地域講習会 (図書コース)の開催

国立情報学研究所(NII)と国立大学図書館協会中国四国地区協会事業委員会の共催による「平成 18 年度目録システム地域講習会(図書コース)」が 8 月 2 日から 4 日までの 3 日間、本学で開催されました。

この講習会は、NII が提供している目録所在サービス参加機関の目録業務担当者が共通に理解しておくべき、総合目録データベースの構成、内容、データ登録の考え方を修得するもので、今年度は NII のほか、全国各地の 11 大学で開

催されました。

本学の会場では、中国四国地区や九州地区の大学図書館員を中心に 22 名の受講（ほかに 6 名がオブザーバ参加）があり、講師は本学職員のほか、NII や鳥取大学、島根大学の職員が務めました。



#### ●大学情報機構 2006 オープンライブラリー開催

平成 18 年 12 月 2 日、山口大学姫山祭にあわせて「大学情報機構 2006 オープンライブラリー」を開催しました。

図書館、メディア基盤センター、埋蔵文化財資料館との共同企画で、それぞれが特色を生かした企画を展開しました。

企画内容は、  
「企画展示 ～長州ファイブ～」  
「埋蔵文化財展示～幕末期の吉田キャンパス～」  
「インターネットラジオライブ放送」

当日は、図書館の通常開館を実施しながらのものでしたが、一般市民約 120 名以上もの来館がありました。先着 100 名には、職員が作成した手作り勾玉首飾りも配られ、その出来の良さに多くの方が感心されていました。今後もこのようなイベントを開き、大学情報機構の活動を、学内および地域の方々に PR していきたいと考えています。当日の様子を映像にて公開しておりますので、下記のページから御覧ください  
<http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/event/>

#### ●山口市広報番組内での映像としての史料提供（林家文書）

当館では、周防国吉敷郡上郷村仁保津（現在の山口市小郡仁保津）の豪農であった、林家の資料、林家文書を貴重書として所蔵しています。林家歴代の中でも、特に注目されるのが、10 代当主の林勇蔵という人物です。彼は、文政 10(1827)年以降、庄屋役、小郡宰判大庄屋役を歴任し、地域社会の指導者として産業奨励、貧民救済、救荒備蓄に尽力し、幕末維新の激動の時代に活躍しました。また、晩年には藩政期以来の課題であった榎野川の治水事業に尽力しました。この治水事業が、現在、山口朝日放送で放映中の「やまぐちしま専科」という番組内で取り上げられ、当館所蔵の林家文書の中から、林勇蔵が明治時代に記した日記、「林勇蔵日記」4 点が映像で紹介されました。

撮影当日は、山口朝日放送のスタッフと山口市の広報担当の方が来られ、普段見ることのない古い資料を珍しそうに手に取り、日記の中から現代でも読める漢字や語句を見つけ、当時の生活を想像しつつ、興味深そうに資料を見ていたのが印象的でした。

#### ●山口大学図書館・山口県立山口図書館・山口県立大学附属図書館 相互協力協定の締結

平成 18 年 7 月 31 日、山口県立山口図書館第一研修室において、山口大学図書館・山口県立山口図書館・山口県立大学附属図書館の相互協力協定書の調印が行われました。



握手する 3 館長



11 時より行われた調印式では、調印に先だつて山口大学の大場情報環境部長からこれまでの経過及び趣旨説明が行われ、その後各館長による協定書への調印が行われました。

調印終了後、本協定に基づく事業計画が策定され、10月1日より2週間に1度、3つの図書館間で相互貸借物流の試行を行うことが盛り込まれると同時に、9月30日に開催された「山口

県図書館振興大会」において山口大学で作成した「山口市の探訪展」を行う事等が決定されました。

また、3館の人的交流も目的の1つとして協議を行い、今年度中に山口大学図書館と山口県立山口図書館との間で相互に研修出張を実現すべく検討も重ねられております。

### 学生希望図書申請受付中！



図書館ホームページから学生希望図書の申請ができるようになりました。以下の URL またはトップページのロゴからアクセスしてください！  
<http://ds22.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~ganmo/stbook-request/po-login/> (ID 認証あり)

### 本学関係教員著作物寄贈図書

寄贈者 (寄贈順)	書名
尾崎 千佳 (人文学部)	西山宗因誕生四百年記念 宗因から芭蕉へ / 八木書店
岩尾 康広 (理学部)	新編精子学 / 森沢正昭・星和彦・岡部勝編 / 東京大学出版会
田淵 太一 (経済学部)	貿易・貨幣・権力 国際経済学批判 田淵太一著 / 法政大学出版局
城下 賢吾 (経済学部)	パーソナルファイナンス入門 私たりの生活とお金 榊原茂樹・城下賢吾・姜喜永・砂川伸幸編著 / 中央経済社
早崎 峯夫 (農学部)	武者小路実篤講演録 人生について / 調布市武者小路実篤記念館
溝田 忠人 (工学部)	山頂はなぜ涼しいか 熱・エネルギーの科学 科学のとびら 47 日本熱測定学会編
辻 正二 (人文学部)	現代の社会的解読 インTRODクシヨソ社会学 山本努・辻正二・稲月正 著 / 学文社
加藤 宏文 (人文学部)	源氏物語の端役たち /加藤宏文 著 / 渓水社
纈纈 厚 (人文学部)	「聖断」虚構と昭和天皇 / 纈纈厚 著 / 新日本出版社
纈纈 厚 (人文学部)	いまに問う憲法九条と日本の臨戦体制 / 纈纈厚 著 / 凱風社

### 編集後記

予定より大幅に遅れましたが、No.74号を発刊することができました。今号は系長埋蔵文化財資料館長(副機構長)から巻頭言をいただいた。埋蔵文化財資料館と図書館連携による情報発信、

大学ミュージアム構想。これに本学の情報基盤を支えるメディア基盤センターとも連携し、ぜひとも実現にむけて一步一步前進していきたいと思いを強くしました。

山口大学図書館報 「Library News」

編集・発行 山口大学図書館

No.74 2007年2月1日発行

〒753-8516 山口市吉田 1677-1

<http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/>

TEL. (083)-933-5183 FAX. (083)-933-5186